

『昭和とわたし』

2019年11月06日

澤地久枝氏は、昭和、殊に旧憲法時代に起きた諸々の事件について、膨大な書物を著している。私は、ほんの少ししか読んでいないが、『妻たちの二・二六事件』は印象深い本であった。陸軍の青年将校たちが政治の腐敗や農村の貧困に怒り、クーデターを起こしたが、反逆罪とされ、首謀者たちは銃殺刑になった。澤地氏は、銃殺刑死した将校の妻たちを訪ね、彼女たちの生き様を著している。光を浴びた勇ましい男たちではなく、陰にいた女性たちの悲しみや苦悩を描いたノン・フィクションを、感銘をもって読んだ。

澤地氏は、今年の9月に『昭和とわたし 澤地久枝のこころの旅』を上梓している。「帯」に「本書はわが人生のアンソロジーです」と書いている。彼女の人生の折々を踏まえながら、重い問題と軽妙な語りを織り交ぜた選集と位置づけている。

澤地氏は4歳から14歳まで旧満州の満鉄社宅で、活発で多感な少女時代を過ごし、世相の移り代わりを敏感に受け止めている。植民地支配者の立場から、戦争に負けて、難民となり、死の恐怖に怯えながら帰国するが、帰国後も、貧しさに苦しめられた経験が彼女の原点となっている。私は彼女より9歳年下であるが、満洲で生まれたので、似たような体験がある。ソ連兵がマンドリン銃を持ち、土足で家に上がり込み、時計を出せと脅した。父が保存していたイダコの缶詰を振る舞ったので何も取らずに帰って行った。帰国に際し、箆を敷いて家具、調度品などを売った。その時、ソ連兵が中国人女性を追い回しているところを見て恐ろしかった。トラックに乗せられ、港に運ばれ、そこで、荷物を検閲され、良いものは全て、ソ連兵に没収され、丸裸で帰国した。しかし、比較的治安の良かった大連市で、家族と一緒にだったので、ソ連の囚人兵に怯えた澤地氏ほどの恐怖感はなかった。

澤地氏は、苦学して夜間大学で学び、五味川純平氏の『戦争と人間』の資料助手を務め、物書きの鍛錬を積んでいる。彼女は「わたしがやろうとしたことは、男女の別を問わず、時間が忘れ去り、歴史の記述からはぬけ落ちた人びとをささやかながら書きとめる仕事であった」、また「戦場でむかえた死。あるいは空襲や原爆という、日常生活の場へ男女老若の別なく、おそいかかってきた戦争死。その死に責任があるのは誰なのか、歴史の行間に埋没させられたこれらの死者たちは、もし声があるならばなにを語るのだろうかという思い。現在に死者をよみがえらせ、あるべき『歴史』のひとつまとしてとどめたいとひそかに考えることから、わたしのテーマをみちびきだされてくる」と書いている。

私は高校時代、歴史の先生から、歴史は勝者の側が作るが、庶民の側からの歴史を書いてみたいと言った言葉が忘れられない。澤地氏は、まさに、声にならない人々の声を聞き取り、著わそうとしている。それは、時代の権力者たちの横暴な姿を写し出す。

澤地氏は「九条の会」の発起人になり、「平和憲法守れ」を呼びかけた。集会で、分かり易い言葉で、説得力のある話を度々聞いた。彼女の平和への思いは、言葉を奪われた人々の声を代弁している。「九条の会」は今や全国で、七千を超す市民運動に成長し、平和運動を展開している。彼女が考案したキャッチフレーズ「アベ政治を許さない」を、金子兜太氏が揮筆した墨字のプラカードを掲げるデモは至る所で見られた。1946年11月3日は、新憲法が公布された日である。澤地氏は、11月3日を記念して、毎月3日に「平和憲法を守れ」のスタンディングをしようと呼びかけた。「港南台九条の会」は、彼女の呼びかけに応え、毎月3日は、港南台駅前13時から30分間、「アベ政治を許さない」のプラカードを胸に当て、スタンディングをし、三千万人の署名活動を続けている。